

## 大学とは何でしょうか？

人文学部教授 岩 隈 敏

共通教育科目「哲学」、文化学科「基礎演習」等での私の授業は、大学が誕生した時のその理念と、大学の歴史について話すことから始めました。

大学とは何であるか？そこではどういう教育が行われたのか？それを考えることで、新入生諸君に大学生の自覚をもって欲しいと願ったからです。

大学の起源は中世ヨーロッパにあります。大学は教師と学生の、一種のギルド（同業者の自治団体）として発足しました。イタリアのボローニャ大学は1088年、フランスのパリ大学は1150年頃、イギリスのオックスフォード大学は1167年、ケンブリッジ大学は1318年に創設されています。

大学設立の目的は何だったのでしょうか？それは、聖俗の外部権力に対して、真理を探究する学問の自由という特権を確立するために、闘争することでした。それと同時に、内部では、共通のカリキュラムを定め、所定のカリキュラムの修了者には学位（doctor）を認可することでした。

学問の自由を抑圧しようとする聖なる外部権力はキリスト教会です。聖書の記述に違い、反する学問的主張は教会によって弾圧されました。G. ガリレイはコペルニクスの地動説を是認したため宗教裁判にかけられました。学問の自由を抑圧しようとする俗なる外部権力は政治権力、つまり国家です。太平洋戦争中、治安維持法によって左翼思想が弾圧されたことは記憶に新しいところでしょう。宗教権力、政治権力は、何時でも何処でも、学問の自由をいろんな形で抑圧、拘束してきたのです。

大学の学部構成と教育内容は、どのようなものだったのでしょうか？大学は、予科的な学芸を教える哲学部と、専門教育を行う神学部、法学部、医学部（すべての大学がこれらの全学部を揃えていたわけではありませんが）から構成されました。

哲学部は、教養を身につけるための学部であり、

専門の三学部の基礎教育を行いました。学生達は哲学部を修了してから、各々の専門学部に進学したのです。そして、学位授与権をもつのは専門学部だけであって、哲学部は専門学部でないことから、授与権をもちませんでした（ドイツ系の大学で哲学部が学位授与権を獲得するのは、驚くことに、19世紀になってからのことです）。

哲学部で教えられたのは自由七科（seven liberal arts）です。それは三科と四科に分かれます。三科（trivium）とは、論理学（logica）文法（grammatica）修辞学（rhetorica）であり、四科（quadrivium）とは、天文学（astronomia）幾何学（geometrica）算術（arithmetica）音楽（musica）です。

少し注意すれば分かるように、三科は言葉、言語に関係します。四科は自然に、あるいは自然研究に必要なものに関係します。中世のキリスト教世界において、神は二つの書物を書いたと考えられました。それは〈聖書〉と〈自然〉です。三科は〈聖書〉を、四科は〈自然〉という書物を読むための学問なのです。

とすれば、大学生が、教養として、基本的に身につけなければならぬことは、神（一般的に言えば、人間を超えた無限者、絶対者ということになるでしょう）が書いた〈聖書〉と〈自然〉という二つの書物を読んで、人間と神（絶対者）、人間と人間、人間と自然との関係の、本来的な在り方を考え、正しい、善い生き方をすることであったと言えるでしょう。

ついで、神学部、法学部、医学部の上級学部では専門教育が行われました。なぜこれらが専門学部とされたのでしょうか？それも、よく考えると分かります。それは、これらがすべて、人間にとって抜き差しならぬ〈生と死〉の問題に関わるからです。医学が人間の生死に関わることは言うまでもありませ

ん。神学、一般的に言えば宗教学は、人間の魂の永続性、不死性と救済を、仏教の言葉でいえば、生死からの出離と〈後生の一大事〉、つまり救済を問題にします。法学も、死刑制度の例で分かるように、人間の生殺与奪権に関わります。

アメリカの西部開拓史を描いた西部劇を見たことがありますか？西部の開拓地に一つの町が発生し、それが共同体として成り立つためには、基本的に何かなければならないでしょうか？まず、教会があって聖職者がいなければなりません。そして、病気を治す医師がいなければ困ります。紛争が起これば、その処理にたずさわる判事（辺境地では、訴訟があった時だけ出張して来るようです）が必要です。これらの職業、それに関わる学問は、一つの地域共同体が共同体として存立するための必須の条件でもあるのです。

とすれば、基礎学部である哲学部を修了して専門学部に進学する、という大学のシステムにおいては、専門的な学問を修め、人間の〈生と死〉についての確な、正しい判断ができるためには、まず人間としての教養を身につけなければならない、言い換えれば、人間と神（絶対者）、人間と人間、人間と自然との、本来的な関係の在り方を学び、正しい、善い生き方ができなければならない、とされたということでしょう。

聖職者、判事、医師の三者、とくに医師がうける報酬が〈honoraria〉と呼ばれたことにも注意しなければなりません。それは〈労賃〉や〈賃金〉、あるいは〈代価〉といった意味ではなく、むしろ〈名誉〉であり、〈尊敬〉という意味に近いものでした。このことは、それらの仕事が営利目的で行われてはならないことを意味します。金儲けをしてはいけないのです。なぜでしょうか？よく考えてみなければなりません。それは、思うに、聖職者、判事、医師たちが〈人間の不幸〉を相手にしているからではないでしょうか。

人間だれしも、生きているかぎり、つねに死の可能性に晒されています。いつ、どこで死ぬか分かりません。「死期はついでを待たず」、つまり「老少不定」、順序どおりにやって来るものではありません。人間はすべて有限で、不完全な存在者です。幸いなことに、死に値する罪は犯していないとしても、日々、

たしかに何らかの罪は犯しています。だから、いつ死に値する罪を犯すことになるかも知れないのです。みずから、よろこんで罪を犯し、死にたいと思うひとは誰もいません。ひとが死に値する罪を犯したり、いつ訪れるとも知れない死期を迎えたりすることは、そのひとにとって最大の不幸なのです。その不幸、悲しみを、それらの仕事は相手にしています。ひとの不幸、悲しみにつけ込んで金儲けをしようなんて思うことは、言語道断なのです。

時代が変わるとともに、大学で学ぶ者の階層も、人口も変化します。それにともない、専門学部の構成や教育内容も大きく変わりました。しかしながら、大学の理念、基礎教育と専門教育の理念は、発足当初から、何も変わっていないのではないのでしょうか。

近ごろ、産、官、学の共同が、声高に叫ばれ、推奨されています。それ自体、悪いことだとは、決して思いません。しかし、産業・経済界や、国家から多くの研究費を集め、支給される学問でなければ、また企業利益、国益に貢献する学問でなければ、立派な学問ではないかのような風潮を、時に感じるがあります。

政治、経済や一般社会などの外部世界から、直接、影響されない自由と独立を保ち、外部世界が誤り、道を逸れた場合には、適宜それを批判し、向かうべき正しい方向を指し示すのが大学である。この大学本来の役割が、発足当初から何も変わっていないことも、決して忘れてはなりません。

## （参考文献）

- \* 平凡社刊『世界大百科事典』・「だいがく 大学」の項目（執筆者 寺崎昌男）。
- \* 村上陽一郎著『生と死への眼差し』（青土社 1993）
- \* 『徒然草』第百五十五段
- \* 岩波ブックレット NO. 938『大学の自由と大学の危機』（岩波書店 2016）

（この拙文は『文化学科フォーラムジャーナル』第6号（2007）、第13号（2014）掲載の文章に多少手を加えたものです。）

## ロレンス文学の魅力

人文学部教授 馬 本 誠 也

### ロレンス文学との出会い

福岡大学に赴任して、まもなく42年の歳月が経とうとしています。その前に2年間熊本のミッション系の高校で教鞭を執りましたので、都合44年間教員生活を送ったことになります。福岡大学では、昨年末まで8年間副学長として行政職に専心しましたので、それ以外は自由な学風の下でのびのびと研究できたことを感謝しております。私が所属した人文学部では、規模の大きさもありますが、数多くの同僚、先輩に恵まれました。特に一つだけ例を挙げれば、「アミエルの日記」の翻訳で知られている土居寛之先生と知遇を得たことです。当時、仲間と同人誌を出していたのですが、それをお読みになった土居先生から長いお手紙を頂き、早速お礼を申し上げると、六本松の居酒屋にお誘いを受けました。当日、やや緊張してその場に赴くと、先生は「今日はあなたとお話するので、ロレンスのチャタレーを読んできました」と切り出されました。これには、すっかり恐縮してしまいましたが、土居先生には、人間関係の基本を教わったような気がしています。

ロレンス文学との出会いは、九州大学大学院修士課程に入学する際に当時の専攻主任教授の元田脩一先生から、現代文学をやるのであれば、後世に残るような偉大な作家を研究しなさいと言葉をかけてもらったことがきっかけです。当時はT.S.エリオット(1888-1965)の全盛時代でしたが、小説の分野ではD.H.ロレンス(1885-1930)やジェームズ・ジョイス(1882-1941)も高く評価されていました。ちょうど春休みに*Sons and Lovers*を読んで、旧来の生き方に満足することなく、新しい生き方を模索する主人公に強い興味を持っていたので、ためらうことなくロレンスを研究対象に選びました。ロレンスは長編小説10篇を始めとするおびただしい作品を残していますので、その全体像を捉えるのはたいへんな作

業です。しかし、*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*, *Lady Chatterley's Lover* と読み進んでいくと、ロレンスが目指した世界が、朧気ながら浮かび上がってきます。

以下、福岡大学で教育研究に携わる中で、ロレンス文学の時代背景や主要作品の主題について、私が理解してきたことを、はなはだ断片的でまとまりに欠けますが、過去の論考を基にしまして、思いつくままに述べてみます。

### 文明の破局と「個」の喪失

ロレンスの時代状況の把握・文明に対するきびしい危機意識は、「我々の時代は本質的に悲劇的な時代である」で始まる*Lady Chatterley's Lover*の有名な一節に如実に表われています。天才的な洞察力と透視力を身につけていたロレンスは、ヨーロッパ文明の破滅にも敏感に反応しました。西洋文明の衰亡を指摘した書物にシュペングラーの『西洋の没落』(1918-22)があります。ロレンスも『チャタレー』の第一稿と第二稿の中でこの書物に言及していますので、その影響は明らかであります。

しかしながら、ロレンス文学の特異性は、こうした文明の破局の中で、何とかして、個人が生き延びていく方途や希望を描いていることです。機械文明の発達や科学技術の進歩の中で、ともすれば生きることへの無関心、無感動が人々の心の中で常態化しています。例えば、主人公のひとり、コンスタンス・チャタレー卿夫人を取り巻く生命感の喪失は作品全体にあまねく漂っています。こうした悲劇的な時代状況は、基本的には今日も変わっていないと言えます。

ロレンスが小説の主人公の生き方を通して模索していった世界も、その延長線上で捉えることが出来ると思われます。即ち、「個」の喪失から脱却し、



如何にして喪われた生命感を恢復して、人間の内部から湧き出るような生きる力、「澆刺とした自発性（“spontaneity”）」を発揮するかというロレンス文学のライトモチーフへと繋がっていくのです。それを考察する手掛かりとして、私は「自然」、「神」、「愛」の三つのキーワードに着目しました。

### 自然と交流する「内なる神」

ロレンスの描く自然については、『緑と生命の文学』（松柏社、2001）の第4章「ロレンスの自然観」で詳述しています。作中人物と小鳥や植物を含む自然界との交流・交感は、ロレンス文学のドラマが人間社会の狭い領域内だけで成立しているのではないことを指摘しました。自然は、宇宙的な広がりの中で、人間の行為の意味や登場人物の生き方を照らし出している鏡となっているのです。

従って、ロレンスにとって〈自然〉とは、単に外的な物質的存在に留まらず、私たちに向かって躍動し、語りかけてくるとき、はじめて有機的生命体として意味を成てきます。作中人物が、積極的に他者（自然）との関係を築こうと動き出すのは、第3作目の *Sons and Lovers* の主人公 Paul から始まると思います。Paul は、自己の内部に存在する〈神〉を認識し、その内在神を手掛かりに原初的世界に没入し、「偉大な神 “the great Being”（宇宙・万物）」と触れ合おうとします。その内在神に触れてロレンスはこう述べています。「人間は善悪の区別を自己の内部で感覚的に把握し、自らの神を徐々に認識する忍耐を持たなければならないという基本的な認識にポールは到達していた。」ロレンスが、ここに言う「自らの神」、即ち内在神としての〈内なる神〉こそが、真の意味での〈他者〉との関わりを可能にする重要な鍵となってきます。ロレンスはその〈内在神〉を「根源的で、自発的な自我（“the primal, spontaneous self”）」と呼んでいます。ロレンス文学における「神」については、日本英文学会で発表し、『福岡大学人文論叢』（第24巻第4号、1992）で拙論をまとめています。

### 「神」（愛・生命・光）

「神」を定義することは出来ませんが、その属性によって「神」を語ることは可能だと思われます。

その一つである〈愛〉については、『愛のモチーフ』（彩流社、1995）の中で、『新しい〈愛〉は可能か——ロレンス文学における〈愛〉のゆくえ』という論題で考察しています。*Women in Love* の主要人物である Birkin-Ursula の出会いの〈場〉は、感情的な愛の場を超えた深い非人間的な領域——神秘的な生命が噴出し、流れ出る始原的世界——であることを、ロレンスは示しています。そして、彼らの成就した愛の本質が〈旅〉であることを物語っており、彼らは、意識下の精神の深みに向かう〈心の旅人〉にほかなりません。

ロレンスの希求する愛の世界がそうであるように、生命感を発揮する〈場〉にあっては、ある位相に停滞するのではなく、常に新鮮でなければならない、というのがロレンスの考えであります。次の言葉は、私の好きな言葉でときどき引用していますが、ロレンスは、彼の志向する〈生命〉の世界を生命の樹に譬えて、その自発性を次のように強調しています。——「生命の樹は陽気な樹であって不断に葉を落として、まったく異なった芽を新たに出す。」

人はパンのみで生きるのではない、とロレンスはイエスに倣って言っています。「人間は、彼自身と他者ないしは他者たちとのあいだの滋養豊かで、創造的な流れに即して生きる」という思想が、ロレンスの生命哲学の基本であり、この思想は、*Women in Love* で Birkin-Ursula の二人が成就した愛の構造と密接に繋がっている、と指摘できます。

### 「個」の在り方と人間の〈復活・再生〉を考える

新しい〈愛〉の成就という観点からロレンスの小説群を展望してみると、小説の主要人物が目指す生の領域〈存在のもう一つの様式〉は、いずれも共通しており、彼らが新しい愛を手掛かりにして踏み込もうとした神秘的な生命の源に通じるものであることは論を俟たないと思われます。

小説の上では、ロレンス最後の作品 *Lady Chatterley's Lover* の Mellors-Connie の関係を通して、人間の〈復活・再生〉のドラマが実に感動的に語られています。小説の冒頭に示された「悲劇的な時代」にあって、その新しい〈愛〉のゆくえは、極めて困難な道程に思われてきますが、もはや後戻りはできません。Mellors は「生きることは絶えず前に進むことだ（“Living is

moving and moving on.”)」と言っています。私たちが彼らの関係をどのように評価しようとも、少なくとも次のことは指摘できると思います。即ち、ロレンスが現代の読者にその愛の世界を開顕してくれた生命の源に触れることにより、私たちは、今まで以上に充実して生きることのヒントをそこから学ぶ、ということ。



## 私の研究生活

理学部教授 秋 山 獻 之

### はじめに

1971年4月に福岡大学理学部応用数学科の講師として赴任した。爾来定年退職を迎える2017年3月までの46年間は福岡大学の一員として過ごしたことになる。私の人生の大半は、福岡大学での生活にあったといっても過言ではない。ここに無事に定年を迎えるにあたり、大学関係者の皆様はもとより、応用数学教室の皆様、また共に数学を学んだ多くの学生の皆様に、心から感謝を申し上げたいと思う。ここで私の研究生活を振り返ってみる。

### 赴任の頃

就職した当時の専門は「有限置換群」で、対称群、交代群以外で高い可移性をもつ離散的なマッシュウ群の特徴付けを目指して、4点の安定化群の性質による4重可移群の分類を研究していた。ところが、その当時超速の発展進歩を遂げていた「有限単純群の分類定理」が完成し、この結果を用いることによって、2重可移群の分類も完了することとなり、研究課題の変更を余儀なくされることとなった。

しかし4つの離散的な単純群であるマッシュウ群には興味があり、その構成の基本となっている特別なデザインについて研究を進めた。さらに、そのなかで、歴史的にも多くの研究がなされ今なお多くの問題を抱えている「射影平面」に研究テーマを移していった。だが思うように研究成果を上げられない時期が続いた。

### 大阪大学での在外研究

当時、応用数学教室は若いスタッフが次々に赴任し、活気に満ち溢れていた。大学院も設置され、それぞれの先生方の活発な研究活動が行われていた。その中心として活躍されていたのがいまは故人となられた蛸原先生であった。私のことを気にかけてく

ださり在外研究（国内）を勧めて下さった。

1987年に、院生のときにお世話になった当時大阪大学理学部長であった永尾汎先生のもとで在外研究員として半年を過ごした。当時大阪教育大学には大山豪先生がおられた。大山先生は、私が院生のときには山口大学におられ、置換群の問題でご指導を受けたこともあり、週一回天王寺での大山ゼミにも参加した。そこで、その後の研究仲間となる中川暢夫先生（近畿大）、平峰豊先生（阪大）、吉荒聡先生（大阪教育大）、末竹千博先生（尼崎南高）と出会った（（ ）内は当時の所属）。大山先生の研究も射影平面に変わっていて、有意義な半年を過ごすことが出来た。その時のメンバーは今でも「有限幾何とその周辺」研究グループとして継続しており、それぞれの研究テーマは少しずつ変化したものの、今でも公私共々研究と交遊を深めている。また、その翌年から九州大学に来られることになっていたオハイオ州立大学におられた坂内英一先生とも出会い、集中講義も聞くことが出来た。この半年の生活が、私の研究生活の大きな転換期となった。

### 在外研究以後

その後20年近くを、近畿大学の中川先生がこの研究グループの世話人として集会を開催され、私も福岡から年に少なくとも2回はこの集会に参加し続けた。そんな中で、末竹先生の位数27のHering平面の一般化に触発されて、位数27のSherk平面を特徴付け、さらに末竹先生と共同研究でこれを一般化し、またそれを発展させた論文を出版出来た。この一連の研究で、1994年に「位数 $q^3$ の移行平面の研究」で九州大学から博士（理学）の学位を取得した。

一方、1988年に坂内先生が九州大学に来られてからは、月1度の九州大学での「代数的組合せ論」のゼミにも参加して、「アソシエーション・スキーム」

の研究も平行して進めた。

### フロリダ大学での在外研究

1998年に、更なる幅広い研究を目指して、射影平面を研究していた C. Ho 教授のいたフロリダ大学に1年間在外研究員として留学した。フロリダ大学には当時 C. Ho 教授の他に有限幾何の Drake 教授や、有限単純群の分類でフィールズ賞を受賞した J. G. Thompson 教授もおられ、温暖な気候の中で有意義な研究生生活を送ることが出来た。教室の談話会や有限体の国際シンポジウムでも講演することが出来、また代数のゼミ、Thompson 教授のゼミにも参加して、多くの影響を受けた。また、他の分野の多くの日本人留学生とも交流が出来た。偶然にも Thompson 教授と同じマンションで1年間を過ごしたことも、良い思い出になった。この期間に、アソシエーション・スキームに関連する論文も出版することが出来た。

### フロリダ大学留学以後

フロリダ大学の留学と前後して、研究仲間に変化が起きた。1996年に平峰先生が大阪大学から熊本大学へ、2005年に末竹先生が福島高専から大分大学へ、それぞれ教授として転勤された。これによって、「有限幾何とその周辺」研究グループの主要メンバーが九州に集まったため、それぞれの研究が一層活発となり、共同研究も進んだ。特に、末竹先生が大分大学にいられてからは、「有限幾何とその周辺」研究グループの参加者も増え、田中正紀先生（崇城大学）も新たに参加され、近畿大学や東京女子大学だけではなく、大分大学、熊本大学、福岡大学で少なくともそれぞれ年1回は研究集会を開き、崇城大学、九州東海大学等でも開催して、活発な研究交流を行った。その結果、ある射影平面の問題を対称横断デザインの問題としてとらえて末竹先生との共著論文が出版出来た。これをきっかけに、「対称横断デザイン」に関する研究を本格的に始め、平峰先生の相対差集合の研究との関連で、一般アダマール行列の研究へと発展していった。

また、2009年には、当時院生であった小川君の協力の下に小さな位数の対称横断デザインの例を計算することが出来た。

### 2010年以降

永年にわたって共に研究を続けてきた仲間も、2012年に中川先生が、2014年に末竹先生と田中先生が、2015年に平峰先生（2016年ご逝去）が、それぞれ定年退職され、現在は吉荒先生（東京女子大）、谷口先生（香川高専）が「有限幾何とその周辺」研究グループの中心となって活躍されている。

### 結び

私の研究生生活も福岡大学での生活と同様に、多くの良き仲間との出会いと交遊で、極めて限られた分野ではあったが十分に数学を楽しみ、それなりの成果を上げることが出来た。唯々、感謝、感謝である。「有限幾何とその周辺」研究グループの益々の発展を心より祈っている。

最後になったが、節目、節目で在外研究員としての研究生生活を支援していただいた福岡大学と、充実した研究生生活を今日まで支援し、また暖かく見守っていただいた応用数学教室の皆様に、心からお礼を申し上げたい。

